

680
2017年
3月発行

よろこびの泉

わたし(イエス・キリスト)が与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。私が与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

新約聖書 ヨハネ4:14



すみれ

そのやさしさに

水野源三

雲雀がさえずり

すみれが咲く

野で遊んで来た幼い姪は

私に聞くんです

毎日退屈しない?

野へ行きたくない?

そのやさしさに

思いやりに

私は

ただほえむだけです

瞬きの詩人・水野源三 第二詩集

「主にまかせよ 汝が身を」より

作者は小学四年の時、赤痢の高熱から脳膜炎を患い、首から下の機能を失う。十二歳の時聖書に出会いイエス・キリストを信じ、残された機能、目の瞬きにより詩を作られる。

発行所 奈良県生駒市門前町七一四〇 日本ミッション
〒630-0266 電話〇七四三(七三)一七五四 振替口座〇〇九三〇二六六四二番

発行人 ファアベイ・D
編集人 日本ミッション編集部

印刷所 〒350-0303 埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇
新生宣教師印刷部
電話〇四九(二九六)〇七二七

一年分 送料共 九〇〇円
定価 一部 一八円

質問箱

問 僕は小さい時から引つ込み思案で、小学校から不登校になり、部屋に閉じこもってゲームやアニメのヒーローに自分を重ねて空想の世界にひたたり、現実逃避してきました。学校と社会から見捨てられ、これからどのように生きて行けばよいのでしょうか。

答 ゲームやアニメに浸っている瞬間は、惨めな自分を忘れ、現実から逃れることができなくなるかもしれません。しかし、与えられた青春の日々、何もしないで映像の世界に浸って、架空の幻想を心に描いていても人生は開かれませんが、久しぶりに家を出て街を歩いていると、芸能界のスカウトマンが君を見つけて声をかけ、主役に抜擢されて一躍有名タレントになるなんて夢は幼児性です。人は二種類の心を持って生きています。ひとつは「放浪者の心」で、川の流に身を任せる浮き草に似て、どこに流れつくか向上のチャンスはありません。もうひとつは「求道者の心」で、常に真理を求め続け、魂がいつも目覚めている人です。今、若い人が虚無に陥っているのは、今の瞬間さえ退屈しない楽しみに浸る、利他的で、浅はかな生き方に引き込まれ、消費者社会の仕掛けに流され、本当に大切にしなければならぬ根本的な人生問題を、ないがしろにしているからではないでしょうか。人生が大きく変わる節目の春こそ、最も真剣に深く意味を問う時です。誰ひとり、意味も価値もなく偶然この世に生まれてきた人はいないのです。創造の神の計画が描かれ、今の世と時に、あなたという固有の人格と能力を備えた命を、両親の愛の家庭で育てられ、成長してから果たしてほしい目的を持って、生まれてきたのです。イエス・キリストは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」(ヨハネ14:6)と呼びかけています。イエスのところに来る時、知らなかった自己の存在の尊厳に目覚め、最善の使命としての人生が理解できると言っているのです。あなたの人生を導く本当のスカウトマンは、救い主イエス・キリストです。一日も早く聖書を読み、生きる道を見出される事をお薦めします。

(見玉 博之)

親子のしあわせ

389

私が主人と共に佐賀の教会に赴任して二〇年になります。教会には小さな幼稚園が併設されていて、発達に遅れのあるお子さんもお預かりしています。

赴任後しばらくして、Y君というダウン症のお子さんが入園して来られました。コミュニケーションは十分できませんが、優しい子でした。お母さんは、「この子が生まれた頃、死に場所を探して歩いたこともありました。なんでこの子が生まれたのか、自分の過去の罪なのかと悩みました。入院することも多く、車にはいつも入院中に必要な物を用意してありました」と話されました。ある時、クリスマス作家・三浦綾子さんの本を通し聖書のことばに出会ったのです。生まれつきの盲人の前に、だれの罪でこんな状態になったのかを問う弟子たちに対し、イエスさまは、「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」(ヨハネ9:3)と言われました。このことばでお母さんは、Y君を通して神のわざが現れると信じ

希望を与えられたのです。お母さんは、保護者のための聖書会で学ばれ、教会の礼拝にも出席されるようになり、やがて洗礼を受けられました。Yくんも幼稚園での生活を楽しく、運動会にはおばあちゃんやYくんの大好きなおにぎりを作り、家族で応援にいらつしやいました。おばあちゃんは数年後、癌になられたましたが、信仰をもたれ平安のうちに天に召されました。悲しみの中にも、ご家族には天国で再会できる確信がありました。お母さんは、「Yがいるおかげで神さまと出会い、色々悩みはつきないけれど神さまにお祈りできる幸いを知りました」と感謝しておられます。二〇代半ばになったY君は、今も、お母さんと共に教会に来ておられます。

今色々な障がいがあり、悩んで育てておられるお母さんが多いです。自分を責めたりしないでください。大切に育ててほしいと、神様があなたに託してくださったお子さんです。あなたは、一人ではないのです。神様が共におられます。あなたを支えてくれる人々も、きっといるはずですよ。

(相原 幸紀美)



*この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。

劣等感からの解放

京都市 関 誠

双子が良く思われていない時代、双子の弟として生まれた私は、疎んじられるという悲しい少年時代が続きました。しかし、全てをご存じである愛の神は、真の希望なるキリストの救いに導き、劣等感から見事に解放して下さいました。

悲しい少年期

私は一九六一年三月に秋田県鹿角市で三人兄弟の三男として生まれました。次男とは双子未熟児で、当時双子であることをよく思わない姑が医師に、「生まれてこなかったことにして欲しい」と頼んだそうです。「病院は人を生かすところであり、あやめるところではない」と拒否され、このことを聞いた母は熱を出して倒れたと言います。母の姉に子供が無く、私は伯母の子として引き取られました。しかし二歳の時に養母が病気で亡くなり、養父も家を出て行き再婚。私は祖父母に育てられました。やがて母の妹が結婚し婿さんもらいます。この婿さんが今でいうDVで、その原因は私にありました。「実の父母が居るのに、いつまでここに置いておくのか、早く返せ」と暴れたのです。祖父母が土下座して、中学までは置いて欲しいと頼んでも聞いて貰えず、八歳で実の両親の元に帰る事になりました。今までおじさん、おばさんと呼んでいた人が、急に父、母となったのでとても戸惑いを覚えました。実家では、あの姑が健在で、いつも兄と比較され、罵声を浴びました。「兄は良い子だが、この子は



▲開拓20周年記念礼拝で撮影。左から 真哉、恵理哉、私(誠)、妻(みとし)、義哉

生きるいっへの問い

小学4年生の下校時、校門付近で、青い目で金髪ロングヘアのお姉さんが、子供達を集めて4色刷りのカードを配りお話をしていました。「黒・悪い心、赤・イエス様の血潮、白・きよい心、金・天国を現します。イエス様を信じて天国へ行きたい人は手を挙げましょう」。私は何もわからないうまま手を挙げお祈りをしました。その近くには教会が無かったので、その決心はそれっきりになりましたが、イエス様は私の事を覚えておられたのです。八年後、地元の高校を卒業し、神戸市東灘区の酒造会社に就職しました。二十一歳の時、「一人は何のために生きているのか」「何のために働くのか」と思い悩み友人や先輩、上司に聞いても、腑に落ちる答えはありませんでした。そんな時、会社へアルバイトに来ていた青年がクリスチャンとなり、半年ぶりに電話をくれました。「関君も教会に来ませんか?」その誘いに心が「教会?可愛い女の子が沢山いるかも? 行こう」と反応し、

不純な動機で教会に行く約束をしました。

生まれて初めての教会

礼拝です。うす暗く静かなところで、物音をたてたら睨まれるくらいのイメージでしたが全くちがいました。老若男女が大きな声で、アーメン、ハレルヤと手を叩いて賛美をしていました。お話の意味も解らず唯座っていて、最後に献金があった時には、「上手いこと言っ、結局最後はお金を取るのだ」とつまずきました。

また礼拝後、初めて出席した私に、教会員の婦人や青年達が歓迎の握手に來られました。「兄弟よく来たね。」握手と兄弟と言う耳慣れない言葉に「あつ、私の来るところではない。二度と来まい」と思いました。けれども週末になると何故か落ち着かず、教会へと足が向いていました。

それから五ヶ月くらい経った礼拝で、牧師先生がいつものように、説教後、「今日イエス様を信じる方は手を挙げてください」と招きをされました。その日は「今日お前は救われなければならぬ」と、心に強い語り掛けを感じ、手を挙げて立ち上がり、信仰の告白をしたのです。友人も教会の皆様も大変喜んでくれました。

十字架につけたのは私だ

その年の夏の特別な聖会で、講師が会衆に向かってチャレンジをしました。「イエス・キリストは、私たちが頭で犯す罪のためにいばらの冠をかぶせられて血をながした。手で犯す罪のために、手に太い釘を打たれた。足で犯す罪のために、足に太い釘を打たれた。心で犯す罪のために胸を槍で突かれた。完全な贖いをされたにもかかわらず

生きるいっへの喜びへ

未だにイエス様の胸に釘を打ち続け、イエス様を悲しませ、イエス様の胸を痛めている人がいます。」そのことばに私はハッと、顔を膝に深く沈めました。それは、止められない罪を犯していたからです。その時、ある映像が目に浮かんできました。キリストが付けられている十字架に薄汚い格好をした者が梯子を掛けて登り、イエス様の胸に釘を打ち付けている、誰かと覗いてみると、それは私自身でした。この出来事を通して、キリストを十字架に付けたのは私であり、私の罪であることがはっきりと解ったのです。それまでは、キリストの身代わりという意識が薄かったためであり、自分個人のためという罪、咎、呪い、病、呪縛から完全に贖いだしてくださったこと、その証拠として死からよみがえられたこと。助け主聖霊様をおくられたこと。これらの事が解ってから少しづつ私は変化し始めました。

①礼拝を休まず出席し、②青年会で路傍伝道がある時に嘘の理由を作って帰らなくなり、③教会生活を優先するようになり、④罪を悔い改めることができた。そして「人はなんのために生きているのか」との疑問が解決しました。

「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った(イザヤ43・7)。

私自身、何かが出来る出来ないではなく、存在そのものが創造主の栄光であることが分かった時に、劣等感から解放されました。また、人は創造主に礼拝をお捧げする存在であることも知りまし

た。この解放をきっかけに、洗礼を受けました。そしてイエスさまのために生涯を捧げて仕えたいと思うようになりました。牧師先生に相談すると、「主からの召命と聖書の御言葉が必要ですよ。祈り求めなさい」と勧められ、祈り求める中で与えられた御言葉が、「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によつて。」(ゼカリヤ4・6)でした。その後、会社を辞めて神学校に入学。学びと訓練を受けて卒業し、生涯を共にする家内と出会い、大反対を受けましたが、この結婚が主のみこころであるとの確信と平安を頂き、結婚に至り、三人の息子が与えられました。三十五歳の時に、京都市山科区にて開拓伝道を開始。辛い時は、子供たちの存在が大きな慰めと励ましになりました。その息子たちも今は成人し、神様と教会に仕える者として励んでいます。三人がそれぞれの賜物を生かし合い、イー・ワイ・エスというユニットで演奏活動をするを通して、多くの方がイエス様に出会い、救われて教会に根付いていることが何より主の栄光です。開拓伝道から二〇年、幸せを感じる教会を目指して主に仕えています。

「私と私の家とは、主に仕える。」(ヨシヤ24・15)

